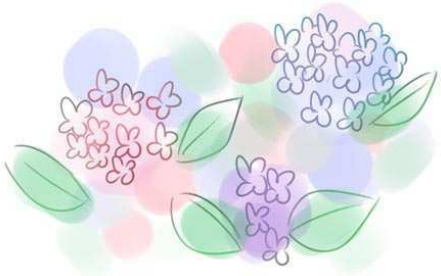
第 11 回

桜美林大学留学生日本語スピーチコンテスト

日時　2012年6月9日（土）

会場　桜美林大学国際寮

文 集



2012年

桜美林大学日本言語文化学院（留学生別科）

目次

まえがき ―――― 3

皆さん方のスピーチを聞いて感じたこと ―――― 4

（発表順）

1．チャウ テイ ゴック スオン　（ベトナム）　「二〇一一年の私の実績」 ―――― 8

2．コリー　モリモト　（アメリカ）　「僕は一体何者？」 ―――― 12

3．王 震　（中国）　「楽しい通学」 ―――― 15

4．呉 汶珈　（中国）　「バイトからの絆」 ―――― 18

5．羅 凱奕　（中国）　「日本に来てからの雑感」 ―――― 21

6．ウランゴー ビャンバツォグト　（モンゴル）　「漢字学習法」 ―――― 24

7．マーク　ギボ　（アメリカ）　「私が得た事」 ―― 27
8．ダワーツェレン　ダワースレン　（モンゴル）　「現在のモンゴル」 ―― 30
9．左　雨　（中国）　「私の夢」 ―― 35
10．イカイカ　カイリアヴァ　（アメリカ）　「自分の文化に気がついた」 ―― 38
11．李　育棋　（中国）　「日本に憧れる」 ―― 41
12．曹　俊煒　（中国）　「留学生活と見学旅行」 ―― 43
講評と賞の概要 ―― 46

まえがき

桜美林大学留学生別科による外国人留学生の日本語スピーチコンテストは十一回目を迎えました。最初は留学生別科に学ぶ別科生だけを対象としていましたが、数年前から大学院に在籍中の留学生を除く全学の留学生に広げました。

日本語で綴られる留学生の皆さんの体験や思いは、格別な味わいがあります。異国日本での体験、その体験の中で触発された思いに新鮮な感動があり、新しい発見があるのは言うまでもありません。と同時に、日本語を母語としない日本語学習者が、その母語で感じ取り、掴み取ったものを学んだ日本語で何とかうまく伝わるように紡ぎだした日本語の表現にも、実に豊かで、興味深い味わいがあり、いつもと異なる感動が与えられます。

ここに第十一回桜美林大学留学生日本語スピーチコンテストで発表されたスピーチ十二編を集め、文集の体裁に整えました。多くの皆さんとともに日本で学ぶ留学生の声を聞き、国際理解を深めてまいりたいと願っています。

桜美林大学　日本言語文化学院長　張平

皆さん方のスピーチを聞いて感じたこと

桜美林大学　学長　三谷高康

今回の日本語スピーチコンテストで、十二名の留学生たちのスピーチを聞いて、私が感じたことをお伝えします。

先ず、皆さん方がこのコンテストに挑戦され、見事にその趣旨に応えてそれぞれ個性的なスピーチをしてくれました。それまでの準備は大変な努力があったと思いますが、難しいことに敢えて挑戦したことに敬意を表したいと思います。

さて、外国語の修得についてしばしば耳にするジョークがあります。

夢のなかでその外国語をしゃべりだすと身に付いた証拠だとか、あるいは、寝言でその言葉が口をついて出ると実力が十分に養われたとか、いろいろと耳にします。要するに無意識のレベルまでに達しているかどうかが、習熟度の基準というわけですが、皆さん方はどうでしょうか。夢なら覚えているでしょうが、寝言はルームメイトにでも聞かなければ確認できません。

しかし、大切なのは無意識のレベルではなく、その外国語の運用能力、即ちどこまで意識的にその言語に精通しているかです。更に、どのようにすれば相手に自分の考えを正確に伝え理解してもらえるか、そのことに随分と頭を使ったことと思います。

実はこうした姿勢は大切な事柄を意味しています。

少し難しい話になりますが、マルチン・ブーバーという著名な哲学者が第二次世界大戦後、一冊の書物を著しました「我と汝」と題された斬新な内容の哲学書です。この書でブーバーは「われわれの言葉は根本的に二種類しかない。一つは『我と汝』(I and Thou, You)。もうひとつは『我とそれ』(I and It)である。この二つの言葉のなかで、『わたし』というのは同じだけれども、まったく質の相違した『わたし』なのだ。『わたしとあなた』というときの『わたし』は全人格をかけて、『あなた』である相手の人格を全面的に認め、それを善しとして肯定的に付き合う関係だ。しかし、一方、『我とそれ』の関係は、相手を単に『もの』として対象化してしまう。その時の自分はもう人格的な存在ではなくなり、『もの』になった『わたし』である。」と言いました。

実例で具体的にお話しましょう。

ある週末の朝のことです。自宅付近のドーナツショップへ出かけました。店内に入りましたら桜美林大学の女子学生が店頭でアルバイトをしているのに出会ったのです。彼女は私の顔をみるなり「先生、いらっしゃい。」そう呼びかけてくれました。私も「あーっ君か。元気でやってる？」と親しみある会話が始まりました。ところが店長のほうに顔を向けた直後から、彼女の口調は急変しました。「何にいたしましょうか。」「お飲み物は？」「お持ち帰りですか。」とマニュアル通りの応対になってしまったのです。店長の鋭い視線があったのでしょう。もうそこには「先生、これ美味しいですよ。」とか「仕事に慣れた？」といった人間的な会話が入る余地は消えてしまいました。彼女はまるで機械にでもなったかのように表情一つ変えず口を動かすのでした。その時、彼女にとって私の存在は知り合いの教員ではなく、顧客一般に化してしまいました。彼女と私は「我とそれ」の関係にかわってしまったのです。そして、彼女は匿名のアルバイトの店員になったのでした。

ブーバーが「我とそれ」の関係は、相手を「もの」のように扱うだけではなく、「わたし」

という人格的な存在をもモノ化してしまうと云ったのは、このことだったのです。人間性が失われていると云われる現代社会ですが、一人一人が人格的存在として出会うことの重要性をつくづく感じます。

その意味で、今回のスピーチコンテストは失われた「我と汝」の関係を取り戻す営みであったと思います。

皆さん方の飾りのない正直な人柄に触れ、ユーモアーのある話に心が和みました。時には胸がつまされるエピソードもありました。人間味のあふれたスピーチに耳を傾けることが出来ました。充実した午後を皆さん方と分かち合えたことに感謝しています。

特別賞

二〇一一年の私の実績

チャウ　テイ　ゴック　スオン

日本語を勉強している私たちにとって日本に留学するのは夢でしょう。そして、その目的を実現するため、色々頑張って、力を尽くしましたね。今日、二〇一一年の自分の成果というテーマで皆さんのまえで話せて嬉しいです。今述べたように、私は夢を実現し、今、日本の土地を踏んでいます。本当に色々頑張りました。クラスの成績ランキングは七位から、五位になり、そして、二位になって、奨学金をもらって日本に来ました。それは私の能力を超えると思いました。なぜかと言うと、クラスメートたちは私に比べると、もっとよくできるのです。しかも、彼らは自分の成績を守りながら突破しようと決心しています。なんとなく一番になるなんて無理だと考えたことがあります。しかし、負けないで、こつこつ勉強し、最後まで競争しました。そこで、勉強方法を改めて、試験のとき、どうやっていい点数が取れるか考える時間を優先しました。そして、奇跡のように、二位になりました。以上のことは勉強の成果のまとめです。そのような成果は自分の努力にふさわしいと思います。ですが、私にとって、成果と言っても、それは十分ではありません。

私が生まれ育った土地は貧乏な町です。また、両親が農民なので、私のスタイルは田舎臭いです。家族が貧困から抜け出せるように、都会に向かい、必死になって勉強していました。父、母、姉、弟は私を信頼しています。三年生のある日、私は今日本で流行っている金髪で家に帰りました。今と全然違いますよ。その時、母はむかむかと怒るような顔をしましたが、何も言いませんでした。私は、無口と言われています。特に、両親の前です。「お母さん、元気ですか？」、「お母さんのこと好きです！」という言葉を言ったことがないほど私と母とは心のへだたりがあるようです。その上、失言をついしてしまったときも、謝りませんでした。今は、恥ずかしいです。そして、時間が経つとともに、私の勉強の成績でお母さんに喜んでもらっても、お母さんのことが大好きなのに、愛情を込めた言葉はどうしても言い出せませんでした。私も辛いです。「外国語を勉強したら、外国のスタイルを真似してもかまわないよ。大事なのは外見じゃない。絶対に外国に行くという気持ちを持ってほしいわ、頑張って！」

と母は噴火したような顔ではなく、優しい目を私に向けて言いました。そのとき、私は心の底で「お母さん、励ましてくれてありがとう。頑張ります。」と言いたかったけれど、また言い出せなかったのです。そして、留学するときが来ました。私はもちろん嬉しいですが、なにより母を喜ばせたことが嬉しかったのです。九月に空港で家族と離れて日本に来ました。しかし、その時も、いつものように、お母さんには何も言いませんでした。でも、この原稿を書きながら、思い出して泣きました。

一ヶ月後、母校の奨学金をもらえると聞いて、直ぐ母に電話しました。母の声を聴いて、母の喜びを感じました。「お母さん、生んでくれてありがとう。お母さんのこと大好き！」ついに言いました。時間が止まり、空間が狭くなるようでした。そして、母の幸せの涙が流れていると感じました。そのことを言うことができると思いませんでした。私も涙がボロボロ流れました。母にとって一番幸せなことは私の成功ですが、私にとっては、母を喜ばせることです。

このような気持ちについて話すのは初めてです。さっきのような言葉は、まだ電話で話しただけですが、帰国したとき、お母さんの前で言えれば、これが二〇一二年の一番大きな成果です。そのことを実現する前に、ここにいらっしゃるお父さんたち、お母さんたちの前で、練習したいです。「お父さんのこと、お母さんのこと、大好きです！」。ベトナム語で「con yêu ba mẹ nhiều lắm」。御清聴有難うございました。

特別賞

僕は一体何者？

コリー　モリモト

皆さんこんにちは。僕はハワイから来た留学生の森本コリーです。なぜ、ハワイなのに日本人の名字なのだろう？と思いますよね。なぜかというと、実は、僕は日系アメリカ四世だからです。最初日本からハワイに引っ越したのは、僕の曾お祖父さんです。その結果、僕にも森本という名字があります。先学期、僕はある授業で、日本の学校の文化や学生などを学んで、さらに日系人としての自分の正体について深く考え始めました。今日は、そのことを皆さんにお話します。

その授業では、小学生や中学生、高校生と様々な交流をしました。僕たちは、日本の学校生活を知るため、色々な学校を訪れました。学校の文化や教育、部活や毎日することなどを子どもたちに聞きました。訪れた学校はそれぞれの魅力的な特徴があり、学校により子どもたちの性格や態度が全然違いました。そして、数えられないほどびっくりしたことと面白いなと思ったことがありました。

まず一番面白かったのは、小学生の給食です。ハワイの小学校では、子どもたちは全員、毎日食堂で食べることに決まっています。それに対して、日本では、子どもたちはそれぞれ担当の先生とホームルームで食べます。そして、給食当番の子どもたちがクラスメートに食べ物と飲み物を出すし、子どもたちは自分で片付けます。このことについて、僕はステキで偉いと思いました。このほかに、僕は生まれて初めて牛や豚などいろいろな動物を飼っている高校に行きました。牧場のような感じでとても驚きました。

この授業では日本の学校文化を習っただけではなく、さらにクラスメートの国の文化、習慣、生活なども習いました。クラスメートの生活を自分の生活と比べると、僕たちの異なっている育ちが分かりました。そして、自分の世界に対する立場が変わって、広がっていきました。

何より一番大切だと気づいたことは、日系人としての自分の正体です。前からずっと僕は日本人じゃないと分かっていましたが、この授業を取ってすぐ、僕が思っているよりも自分

と日本の関係は深いとわかりました。そして、日本に対して自分は一体何だろうと考え始めました。

日系人には色々難しいことや自分は何者だろうという問題などがついてきて複雑です。「僕の血は一〇〇パーセント日本人なのに、僕の日本語は日本人ではない。」僕は、見た目は日本人に見えますが、僕もほかの留学生と同じように授業で日本語を習っています。しかし、日本人は僕に日本人のように話しかけるので、言葉が通じなくてつらい時もあります。さらに、僕より高い日本語能力がある他の外国人を見ると、嫉妬の気持ちが出て仕方がないです。このように毎日乗り越えなければならない問題がいっぱいあります。

しかし、この授業での経験のおかげで、今後は自分の正体を認めることができて、この複雑な考え方を乗り越えられると考えるようになりました。そして、このような不安や嫉妬などをやる気に変えることができると、今は強く信じています。

楽しい通学

王　震

人々は毎日の生活の中に、楽しいことを見つけたほうがいいと思います。私は別科の授業が始まってから、頑張って規律正しい生活を送っています。毎日いつ家を出るとか、いつ帰るとか、いつ食事するとか、時間を決めました。そんな日の中で自転車で通学中にだんだんおもしろいことを発見するようになりました。通学の時間は楽しい時間だと思います。

家を出たら、自転車で市民の日常生活のエリアを通過しなければなりません。よく生活用品と食べ物を買うスーパーの前を通ります。それから病院を通ります。天気がよかったら、そこでときどき患者さんが病院の庭を散歩しているのを見ます。患者さんがどんな病気になったのかわかりませんが、早く元気になってほしいと思います。

続いて、小学校の前を通過します。小学校は豊かな木々に囲まれています。子どもたちがグランドで楽しく遊んでいるのをよく見ます。私の子どもの時を思い出しました。子どもの時友だちと一緒に遊び、一緒に通学したことを思い出しました。いい思い出です。

小学校の前を通過したら、もうすぐ森に入ります。それはあまり大きくない森です。森の入り口に桜の木があります。今年の四月に桜が咲いた時、緑の森をバックにしてピンクの桜がますますきれいに見えました。森の中で空気がおいしくて深呼吸したらとても気持ちがよくなります。毎日この森で犬を連れて、散歩している人とか、ジョギングしている人たちがいます。みんな楽しくて、元気そうです。

森の中を出て、高速道路を渡ると、ゴルフ場があります。この大きいゴルフ場のそばを通ります。ここでゴルフ場の森の中の風景が見えます。手入れされている芝生があります。作業員さんありがとうございましたと言いたいです。きれいな風景が見られますから。

きれいなゴルフ場を通ったら、交差点があります。毎日私の通学の時間は、小学生の通学の時間とだいたい同じです。よく小学生たちは一列に並んで、大人しく歩いています。信号がない交差点を横切る時、車が止まり、子どもが先に通ります。可愛い子どもたちがよく車の運転手さんにおじぎをします。本当に丁寧な子どもたちだと思います。中国でそんなことができたら、とても良いと思います。

もうすぐ学校に着く時、小さい神社があります。赤い鳥居は日本の神社の代表的な象徴です。神社の入り口から、石で舗装した道があって、古い建物が見えます。神秘的な雰囲気に満ちています。中国の寺ととても似ています。中国の寺にも日本の神社の建物のような古い建物があります。

神社を通ったら、学校の建物が見えます。楽しく、頑張って今日も新しい日の勉強を始めましょう。

特別賞

バイトからの絆

呉　汶珈

アルバイトを始めてから半年近くになります。この半年で、いろいろ経験して、勉強になったこともとても多いです。泣きたかった時もあったし、いじめられた時もあったし、感動した時もあります。このようないろいろなことはアルバイトをしている店や、店のメンバーたちとの断ち切ることができない絆になりました。

まず言わなければならない絆は、山本さんとの絆です。バイトを始めた日に、何も知らない私にいろいろ教えてくれたのは山本さんでした。それ以来、私は山本さんを師父と思うことにしました。最初、山本さんはマネージャーより怖い人だというイメージがありました。少しだけのミスでも、雷が落ちました。「頭でちゃんと覚えなさい」、「何をやってるんだ」、「これはだめ」などのような言葉をよく言われました。今でも山本さんと一緒に出勤する時、私は蛇に見込まれた蛙のようにいつもどきどきします。

しかし、ある日、私と親しいメンバーが一袋のお菓子を私にこっそり渡して、山本さんがくれたと言いました。その時、私は非常にびっくりしました。どうしていつも私に厳しい山本さんはわざわざプレゼントをくれたのでしょうか。その日から、私は山本さんに注意を払うようになりました。そのうちに、山本さんは言葉はきついけれど心の優しい人だと発見しました。雷を落としても仕事だけのことで、それ以外にはすごく人当たりがいい人です。また、山本さんからいろいろな勉強ができます。だから、今でも山本さんを怖がっていても、師父として山本さんを心から尊敬しています。

また、いつも笑顔でよく甘えるおばあちゃん小林さん、小さくてもいつもやる気満々の石川さんとの絆は私にとって重要です。いつも優しくて、真剣に私に教えてくれるおばあちゃんたちが大好きです。

最後にいいたい絆は山田さんとの絆です。山田さんは店で唯一私をいじめる人です。原因がわからないので、他のメンバーも不思議だと思います。いじめの内容はつらいので、省略します。一緒に出勤すると、必ずいじめられて我慢できないので、店長にシフトをはずして

ほしいと頼みました。すると、バイトをやめようという考えも何度も何度も出てきました。しかし、やめたい時には、山本さんや小林さんや石川さんなど親切してくれるメンバーたちを思い出しました。山田さん一人だけのせいで皆さんとの絆を捨てたくないので、我慢しながらバイトを続けています。

山田さんとの絆から勉強したのは、周りの人みんなが自分を好きになることは無理で、できるのは自分のことをちゃんとやって、自分らしくすることです。どんな絆でも私の人生の中で重要な経験です。絆を持った人たちに心から感謝します。

第三位

日本に来てからの雑感

羅　凱奕

日本のことを知ってから、大学生として日本語を勉強して、まさか、今、本当に日本に留学しているとは、思いもよりませんでした。振り返って見ると、ちょっと不思議な感じがしますが、今は現実として実感がわいてきました。

「日本に来て、新鮮な感覚がたくさんあるでしょう」と友だちからそう言われました。しかし、そういうことが実際にはありませんでした。飛行機を降りて、バスに乗って、自分の部屋の前に立った時、実家に帰ったような感じがしました。初めて日本に来た私にとって、この感じはどこに由来しているのか、正直、今までも分かりません。

新しい友だちとの出会いを期待していた私は、この間に、いろいろな人と出会って来ました。そして、様々な違いを感じました。日本語を勉強し始めた時、『久しぶり』は、結構長い間、会っていない人に使う言葉」と、先生から教えられました。それを日本の友だちが三

日間会っていない私に言ったので、ちょっと傷つきました。しかし、友だちと付き合っている間に、だんだん分かりました。「久しぶり」と言う言葉は日常生活の中でも、みんながよく使うのですが、意味がずれていたことに気づきました。

私は国際寮に住んでいますが、ある日、韓国人の友人と一緒に野球を観戦しに行きました。その時、私は、「今度一緒に温泉に行こう」と言いました。韓国人の友だちが「必ず行こうね。私たちは、二人とも日本人じゃないから、建て前の話じゃないよね」と言いました。確かに、日本人の話には、建て前の話があります。

日本人の友だちと話していたら、建て前の話についていろいろ話してくれました。例えば、今日は一緒に遊んだ後、別れるとき、日本人は大体「また今度遊ぼうね」と言います。しかし、また遊ぶことは少ないです。それは、お互いに気分よく別れるための言葉のようです。

留学生としての私は、建て前というものがあるのを知っているので、いろいろな細かいところにも注意しました。友だちと付き合っている時も、これは建て前かなという場面にも遭いましたが、やはり建て前と本音の違いが区別できず、本当に大変でした。特に、日本で就

職したい、日本で生活したい私としてはすごく悩みました。その悩みを日本人の親友に言いました。親友は「慣れるしかないね」と言いました。率直に言うと、ちょっとがっかりしました。いったいどれぐらい時間が経ったらこの建て前に慣れるのでしょう。

しかし、それが生活の全てではないと思います。周りの日本人の友人は、みんな、結構正直な人だと思います。そして、優しいです。ある日、スーパーから帰ってきた私が、携帯を見ると、日本人の友人からの未着信メールがいっぱいでした。急いで、日本人の友人に電話したら、「今日は友だちの部屋で勉強会がある、来てね」と、言いました。課題を持って友だちの部屋へ行ったら、友だちは、ほとんど勉強をしていませんでした。聞いたら、先日、私が「課題がちょっと難しい」と言ったので、「日本人として何か手伝うことがあるかもしれないと思った」と言う友だちに本当に感動しました。

まだまだ日本と日本人について、よく分からない点があります。でも、初心者として、頑張って慣れたいと思います。勉強に限らず、生活もしっかりしたいと思います。これから、日本で、知識、常識、生活習慣、大学での勉強など、しっかりと身につけたいと思います。

第一位

漢字学習法

ウランゴー　ビャンバツオグト

「わーっ、会社員の員。この漢字の形はおもしろいね。ここが頭で、ここが体で、ここが足で。ロボットみたい。皆さんもそう思いませんか。そういえば、日本の会社員って、毎日朝起きて、会社へ行って働いて、帰って、同じことをしているから、会社で働くロボットみたいな人だよね。」

これが、漢字が大の苦手だった私が、漢字に興味を持ち始めた瞬間でした。

漢字と私の出会いは日本語を習い始めた小学校からのことです。でも、私は漢字がぜんぜん好きになれませんでした。たとえば、「ひと」。

「これは『ひと』です。音読みは『ニン』、訓読みは『ひと』、意味はモンゴル語で『フン』です。」

そんな先生の説明を聞いても、少しも頭に入りませんでしたし、面白いとも思いませんでした。一文字で、「ひと」、二文字で「にんげん」。別の時に「じんせい」という新しい言葉を見つけたら、もうお手上げです。アルファベットは二十六字なのに、漢字は四千字覚えないと新聞を読めないのです。それで、本当に日本語を学ぶ自信がなくなってしまいました。

そんな私が、高校一年のとき、日本に留学しました。そこで、私は漢字を好きになるきっかけをもらったのです。そこで使った教科書はモンゴルで使っていたものと同じでした。でも、授業は全然違ったのです。その授業は、意味も使い方もよく分からないまま音読みや訓読みを丸暗記させるような授業ではありませんでした。たとえば、困る。

「木が箱の中に入っているでしょう。木を自分のことだと思って、箱の中に入ってしまったら、あなた大変でしょう。だから、この漢字は困るという意味なんですよね。」

びっくりしました。

また、あるとき日本モンゴル辞書を引いて、漢字の言葉を調べていた私に先生が言いました。

「これから、こんな辞書を使うのはやめなさい。モンゴル語じゃなくて、全部そのまま日本語で覚えればいいですよ。」

私はそれにもびっくりしました。でも、それが今でも私の勉強方法です。モンゴル語の辞書は持っていないし、電子辞書も持っていません。

この先生のおかげで、今の私の勉強スタイルがあります。まず、形を見る、そして想像する。たとえば、人。人と人が支えあって人という字が出来ます。こんな深い意味をよくこんな簡単な漢字で表せたねと感激してしまいます。他にも、息子。「自分の心の子ども」と書きます。こうして漢字の勉強がどんどん楽しくなって、私の興味はつきません。漢字は表情の豊かな絵なのです。

数え切れないほど存在する漢字、いくら勉強しても終わることはないでしょう。でも、私は自分の勉強方法を見つけました。まず形を見る、想像する、モンゴル語で考えない。もちろん、それだけですべてができるわけではありません。でも、このおかげで、私は漢字とつながることができました。これからもうまく付き合っていけるだろうと、確信しています。さあ、留学生の皆さんも自分の日本語学習法を見つけて、それを通して日本の文化を理解し合っていきましょう。

特別賞

私が得た事

マーク　ギボ

先学期、私は国際理解訪問授業という授業をとりました。この授業は、いろいろな国や地域から来た留学生のクラスで、日本の小中学校や高校を訪問するフィールドワークの授業です。この授業のテーマは国際理解で、クラスではお互いの国や地域の文化について考えたり、コミュニケーションについて学んだりしました。今日は、私がこの授業で体験したことや得たことを話します。

この授業を取った理由は二つあります。まずは、日本の学校教育のことを知りたかったからということです。私は日系人です。もし、自分が日本に生まれたら、どんな学校教育を受けていたか、どんな生活をしていたか、私は知りたかったのです。二つ目は、将来英語教師として日本に戻ってきたいので、日本の学校のことを知りたかったということです。

クラスを始めたばかりの時、私は恥ずかしがり屋で、日本語を話す自信がありませんでし

た。クラスメートは、いつもは日本語のクラスが違う知らない人たちだから、皆の前で話すのは不安でした。学校に行っても、子どもたちより日本語が下手だから、話すとき間違えないか心配していました。

でも、クラスが進んでいくと、クラスメートと仲良しになりました。クラス以外でも遊んだり、集まったり、話したりするようになりました。クラスで何回も皆の前で話す練習をしたり、ハワイの紹介の練習をしたり、子どもたちのためのワークショップの練習をしたりして、子どもたちの前で自信をもって話せるようになりました。この授業を通して、私は日本語を話す自信をもつことができて、新しい友だちにも出会いました。

この授業を取って、将来役に立つ事も学びました。例えば、初めて会った人とどうやって関係をつくるかということです。人は初めて会ったとき、緊張していて、不安です。アイスブレイクをすると、皆の緊張と不安が解消できて、心を開くことができます。将来私が英語の教師になった時に、子どもたちが前の私のように、不安で、緊張していて、自信を持ってなかったら、アイスブレイクを使って、子どもたちが自信を持って話すようにしたいです。

このように、この授業からいろいろなことを得ました。世界中にたくさん友だちができたし、将来役立つことも学んだし、私も自信を持つようになりました。

ハワイに帰ったら、私の経験を私のような外国人、特に日本で英語教師になりたい人に伝えたいです。

現在のモンゴル

ダワーツェレン　ダワースレン

皆さん、こんにちは！

僕の名前はダワースレンと申します。今日僕は皆さんに現在のモンゴル、外国人から見たモンゴルについてのイメージを発表しようと思います。

自国の事をモンゴル人の目で見るのと、外国人の目で見るのとでは天と地のように違います。

外国人たちのイメージでは、モンゴルは今でも一九二五年の社会のようだと思っているのではないでしょうか。モンゴルは一九二五年ごろに世界で第二番目の社会主義国になりました。その時には僕達のおじいさん、おばあさん達は学校まで馬に乗って通い、ゲルに住んでいました。実は二十世紀の古いモンゴルの事を二十一世紀に外国人が考えているというわけです。

この事を僕は、日本へ来てからもっと分かって来ました。

僕と初めて会った日本人や他の国の人達にいつも「あなたはゲルに住んでいるの」「馬に乗って登校しているの」と聞かれます。

また、「あなたはロシア語や中国語が話せるでしょう」「モンゴル文字はロシアの文字じゃないの」といろいろ質問されます。

そのため、このような外国人のモンゴルについて間違っている所を正しく直して、そして現在のモンゴル、モンゴル人の生活スタイルやモンゴル人について紹介することがこのスピーチコンテストに参加している僕の理由です。

まずモンゴルは独立した広い草原の国です。モンゴルは首都と二十一県で組み立てられています。首都はウランバートルでそれを中心として発展しています。もちろんこんな広い国なので発展の仕方がずいぶん違う場所がたくさんあります。ウランバートルや県の都会を除いて他の地域では今も馬で学校へ行くときもあります。それは車がないということではなくて、田舎の方では交通環境が悪く車より馬のほうが移動に適しているからです。モンゴルは農業の国で気候も農業にぴったりです。だからモンゴルといったら、欧米の人々はすぐ家畜

放牧し、馬に乗っているイメージを思いうかべるかもしれません。

モンゴルでは「母国語、国境、家畜があれば誰が幸福か？モンゴルが幸福です」という言葉があります。だからモンゴルと家畜や遊牧民を差別してはいけません。なぜなら、あの馬に乗っている人達は、都会に住んでいる人々が食べている肉や牛乳など、それに世界中で有名なモンゴルウールやカシミヤを工場に調達してくれるからです。

今のモンゴル人はみんなロシア語が話せないけれど、昔は話せました。僕たちのおじいさん、おばあさん、両親はみんな今もロシア語で話すことができます。それは、モンゴルが以前社会主義国だったおかげだと思っています。しかし、今、民主主義社会へと開放されてもう二十二年目になります。現在のモンゴルの人達はロシア語だけではなくて学びたい外国語を選べるようになりました。たいていの人は英語のほうを選びます。その結果、若者たちは全ての人ではなくてもほとんどの人が英語が分かるようになってきました。なぜ外国語を勉強しているかというと、現在のモンゴルは鉱物産業や観光を中心として発展しつつあるからモンゴルへ旅行する人達が増えて来たからです。そして世界で有名なブランドのショップやハイクラスのレストラン、デパート、ホテルなどが建てられています。そのため若者達は就職するために外国語、特に英語を勉強しているわけです。

モンゴル語、モンゴル文字はロシア語や中国語と一〇〇パーセント違います。モンゴル語はアルタイ方言の言語です。今使われている「キリル」という文字はロシアから入ってきたのは事実ですが、ロシア文字にないものがモンゴル文字にあります。例えばロシア人は「y」「θ」「ū」「Ы」の発音がどうしてもできません。

昔からのモンゴルの字もあります。しかし、それは今使っていません。なぜかというとモンゴルの人は字というより文化や誇りみたいな物と考えた方がいいと思っているからです。

十年前からウランバートルは急に発展して来て、最近ウランバートルの人口は百万人位になりました。それにモンゴルの国民の半数がそこに住んでいます。今ではウランバートルは国際的な標準によって「大きな町」になりました。

都会に住んでいる人達は生活が欧米のようになってきているし、アメリカみたいな文化に若者達は変わっています。要するに、社会はすごく自由になっているわけです。

最後に、モンゴル人というのはどんな国民かを説明します。僕は、モンゴル人はとても熱心でスマートだと思っています。最近の研究によって世界の中でもスマートでＩＱが高い人達が住んでいる国の一つになりました。僕が外国人にモンゴルの人口は三百万だというと、みんなに「少なすぎ」と言われます。少ないですが僕が思っているのは、とてもめずらしい血で、とてもめずらしくてすごい遺伝子だから僕はいつも「僕はモンゴル人です」と言うとき、うれしくて誇りに感じます。

世界の人達がモンゴルについてチンギスハーンやゲル、馬頭琴しか知らないのは僕達が悪いと思っていますが、今後若者達は教育を伸ばしていき、いろいろな事をやって、もっと成長して、自国を発展させて行くから、もうすぐ大国のようになると僕は信じています。

第二位

私の夢

左　雨

私はちょっとした動きでも、条件反射で、体が逃げようとします。この症状は高校二年生の時から、ずっと続いています。高校二年のこの年、私は故郷四川で地震の恐ろしさを経験しました。

崩れた家、パニックに陥った人びと、泣き声、叫び声、地獄のような光景が今も瞼に残っています。

私は、地震が起こった翌日から、徳陽市第五病院でボランティアとして、被災者の血を洗うという仕事に従事しました。臨時に建てられた病室で傷病者のけがを処理しながら、けがをした人に「もう大丈夫、安心して」と繰り返し言いました。ある時、十歳ぐらいの男の子に出会いました。

その男の子は軽傷だったので、私は「ラッキーだったね」と思ったのですが、その子はい

つも何も話さず、無表情でした。

ある日、その子が

「ねえ、人が死んだらどこへ行くの？」と聞きました。私が、

「たぶん、天国へ行くかな。」と答えたら、

「僕は、天国へいけないよね、僕のせいで、友だちが死んだから。」

といったのです。私は、何といえばいいのかわからず、黙っていました。

その後、彼の両親から、地震の時、彼が学校の建物の外に出ると同時に、建物が崩れて後についていた彼の友だちが目の前で死んでしまったことを聞きました。その子は、その時の恐ろしさと、友だちを助けられなかった自責の気持ちから、毎晩悪い夢を見るというのです。

もう四年前のことなので、私は地震のことは少しずつ忘れることができるようになりました。しかし、あの子の目はなかなか忘れられません。

その子のような、地震の怖い記憶に苦しんでいる人は、まだたくさんいます。地震から四年、故郷の村や町は再建されつつあります。学生は学校に戻りました。家を失った人も新た

な家で生活し始めました。

しかし、心の災難はひと時も離れません。生存者は毎日毎日、家族を失った悲しみを背負っています。命が救われても、このような辛さに耐えられなくなって、最後に、自殺した人もたくさんいます。被災者だけではなく、救援活動に参加した医者や兵士も心に傷を受けました。

苦しみにもがいている同郷人のために、私は何ができるでしょうか。あの子のように深い傷を負った人のために、私はどうすればいいのでしょうか？

私はサイコドクターという仕事のあることを知りました。あの恐怖を体験した私は、サイコドクターになって、その苦しみを受け止めてあげたいと思うようになりました。

大災害を経験し、心に傷を負った人たちには、サイコドクターが必要です。それも緊急に。

四川人のみならず、全世界の被災者たちにその苦しみを癒してあげる人が必要です。どんな困難があっても、私はサイコドクターを目指して、頑張りたいと思います。

自分の文化に気がついた

イカイカ　カイリアヴァ

私は、今まで七ヶ月ぐらい日本で時間を過ごしました。その間に「国際理解訪問授業」という留学生むけのクラスを取りました。この授業を登録したとき、私たちは日本の学校へ行って自分の国のことを子どもたちの前で発表すると分かっていました。でも、今考えると、私たちは子どもたちに教えるより、もっとたくさんのことを習ったと気づきました。今日は、そんなことについて話したいと思います。

初めてのクラスで、日本の学校で子どもたちの前で発表する練習のために、私は五つの国から来た留学生と話し合いました。すると、面白いことがいっぱい出てきました。例えば、中国では、午前八時から午後五時ぐらいまでが普通の学校の時間だとか、ベトナムの特別な服のこととか、モンゴルの食べ物とか、ハワイにある日本からきた迷信なども話して盛り上がりました。

しかし、ハワイの面白いことを発表するとき、私は「何を言ったらいいかな？」と思い、

すぐに言えませんでした。「どこにいてもビーチが近いから、学校が終わってから毎日のようにビーチに行きました。」と言いたかったけれど、ハワイでこれは皆が知っていることで、あたりまえだから、あまり面白くないと考えました。でも、他の国から来た留学生、特に海が全然見えない国の人になって考えてみたら、「ハワイの生活は実は本当に最高だな」と気づきました。だけど、おかしいことに、この日まで私は二十一年間ぐらい、この自分のラッキーな生活をあまり深く考えませんでした。この授業で異文化に接したおかげで、私はそれに気づきました。

このように、もちろん授業でたくさん学べることが多いですが、本当の日本の学校を見に行くことも、私にとって大事なことになりました。一番心に残ったのは、中学校に行った思い出です。その活動が初めて中学生に会った活動でした。私がハワイのことを紹介したとき、中学生の皆はすごく元気よく質問をして、私はいろいろ聞かれて忙しくてうれしかったです。私がハワイのことを発表するための写真を紹介した後、皆は遠慮なくどんどん質問して、自分の感想も話し合いました。このときの質問や感想は、先生からの命令ではなくて、本当に

子どもたちの心から出た、知りたかったものだと良く分かりました。なぜ、この思い出が一番心に残っているかというと、子どもたちがだれよりも本当にハワイに興味があるようだったからです。私よりも興味があるみたいでした。皆がハワイへ行きたいと言っていたので、もっと自分の国を誇りにしないとダメだと思いました。このことに気づいて、一番ラッキーだったのは私です。

この学校訪問の授業には、最初は見えないことや考えないことがたくさんあります。実は、このクラスを取った理由は、本当の日本の学校を見るためでしたが、私はもっと大事なことを見ました。私はずっとハワイで育てられたので、ハワイの文化の面白さを忘れていました。でも、日本に来て、他の外国人や子どもたちのおかげでハワイの面白さに気づきました。それは、普通の授業で学べないことで、このクラスを取ったおかげで習えて本当によかったです。もし、日本に来なかったらどうだっただろう？そう考えると、本当にすばらしいことに気づいたと思います。

日本に憧れる

李　育棋

私は日本のアニメを見て以来、日本に憧れていました。子どもの頃、日本のアニメを見たことがあります。アニメをみているうちに、日本のことがますますわかります。私はそれをみて、日本に興味を持ちました。日本はどんな国かと考えているうちに、いつか日本へ行きたいという夢が浮かんできました。卒業した後、ちょうど日本語学校の先生が僕の高校へ宣伝にきて、僕も高校へ行って、先生に日本のことを紹介してもらいました。話を聞いた後で、先生は私に日本へ留学に行きたいですかと聞きました。私は少し考えた後で、日本へ留学に行くつもりだと返事しました。日本語学校で日本語を勉強するうちに、日本人の先生に日本のことをいろいろ教えてもらいました。

私にとって日本へ行くのは夢みたいです。日本へ行けるように、私は一生懸命日本語を勉強しました。日本語の試験に失敗しても、日本語の勉強を諦めたくないです。中国にいる時、私はパソコンの住民になっていたので、週末にどこも行きませんでした。いくら親が私に外

に出かけて、友だちや親戚たちと一緒におしゃべりしなさいといっても、私はどこも行きたくなかったので、友だちがあまりいませんでした。ですから、親は私が将来社会で生きていけるかどうか心配して、私を日本へ留学させてくれました。私はとてもうれしいです。日本へ来る前に、両親はあなたを日本へ行かせるのは違う世界を見させて、暗い性格を変えてほしいからだと言ってくれました。たとえ母親は私が日本へ行くことが心配で、夜ねられなくても、私を一人で日本へ行かせることにしました。両親が私を日本留学させてくれて、心から感謝しています。

飛行機で日本へ来たとき、中国との習慣が違って、大変でしたが、日本はどこでも面白いところがあって、毎日うれしく感じています。友だちは初めて日本の電車に乗ったとき、ちゃんと並ぶことや道を渡るとき、車が通行人に道を譲ってあげるなどの習慣を教えてくれました。大変ですが、日本人のマナーはとてもいいと思います。日本語の勉強は大変ですが、一生懸命がんばるつもりです。

留学生活と見学旅行

曹　俊煒

みなさん、こんにちは。私は曹俊煒と申します。これから留学生活と見学旅行について話したいと思います。

二〇〇六年に私と学校の先生やクラスメートは見学旅行をしました。日本にきたばかりの時、言葉が出ないほどびっくりしました。なぜなら、日本の道には全然ゴミがなく、とても綺麗だったからです。しかも、人々が礼儀正しくて旅行者として本当に楽しかったです。旅行は主に東京と京都へ行きました。東京は日本で一番発展している世界都市だから、文化や経済などが非常に発達していると言われていました。東京にいけば、東京ならではのところへ行かないと残念ですね。私が一番印象に残ったのがディズニーランドです。たとえ平日でも遊びに来る人が多いとガイドさんに言われました。日本人は毎日仕事を頑張っていますが、それだけでなくストレス解消もよくやっていますね。仕事と遊びを両立することが勉強になりました。また、皇居に行って、天皇の存在は日本人の心に象徴として重視されていること

がわかりました。東京の次は、京都に行きました。京都はたくさんの古いお寺や神社がある観光地です。特に金閣寺についてのストーリーがあって、とても感動しました。そこは一休さんと将軍さまの間の友情の証だと思います。最後に和歌山の高校を見学しました。二つのおもしろいことがあったので、ぜひみなさんにお話ししたいと思います。一つ目は私が日本人の高校生と一緒に弁当を食べる時に、「おいしいです」と言いましたが、「本当ですか」と言われました。正直に言うと本当は美味しくなかったのですが、そうだとしても「おいしい」というべきじゃないですか。今思い出すと、多分それは人と地域による文化の違いだろうと思います。例えば、東京にいる人はあまり値切らないで買いますが、反対に大阪の人はいつもやっていますね。和歌山は大阪に近いから多少影響を受けているのかもしれません。だから和歌山の高校生は正直に聞いたのでしょう。

それから、二〇〇九年に私は日本に留学しました。当時青葉寮に住んでいて、各国の人々がいました。部屋はちょっと狭かったですが、設備が整っているので住みやすかったです。また、自分で料理を作らないと生活費が高いので、一度も料理をやったことがない私もちゃ

んとやるようにしました。また、自立しなければいけないことに気がついて、バイトを探し始めました。日本語がうまくないのでよく断られていましたが、友だちのおかげで、やっと大戸屋で働くことができました。新人なので、よく店長に叱られて、悲しんでしまいました。一番印象に残ったのは、「おまえはばかか」と言われたことです。別に「ばか」といわれたから印象に残るわけではないですが、「お前」という単語を勉強したことなかったからです。仕事が終わったあとで、先輩に聞くと「それはあなたという意味で、友だち同士や下の人に使う言葉です。」といわれて、わかりました。大学に入ってから私はよくグループ活動に参加して、たくさんの友だちを作りました。親がそばにいないので、自分で社会を体験し、いつか自立できると信じています。

最後に私がいいたいのは、旅行でも留学でも人生の経験を多く積むことができます。体験の状況と感じが違いますが、心をこめてよく社会に接触すればよい経験ができるのではないかと思います。

以上です。ありがとうございました。

講評と賞の概要

桜美林大学日本言語文化学院　専任教員　石塚美枝

桜美林大学国際寮において、二〇一二年六月九日に行われた「留学生による日本語スピーチコンテスト」は今回で第十一回を迎えました。もともとは留学生別科で学ぶ学生の日本語力向上のためのひとつの目標として開かれましたが、現在では桜美林大学で学ぶ留学生全体に出場を募るようになっています。今回も学群、交換留学生、留学生別科の学生の計十二名が練習の成果を発揮して、大変すばらしいスピーチをしてくれました。

審査は、留学生別科の日本語教員、交換留学生の日本語プログラムの教員、および学群の教員など三～四名で行っていますが、回を増すごとにスピーチのテーマに広がりや深みが出て来ており、審査員にとっては楽しく、悩みの多いコンテストになっています。私たちが審査をする上で最も重要だと考えている点は、自分の独自の視点で物事を捉えているか、そしてそれを分かりやすい日本語や表現で聴衆に伝えることができたか、という点です。その点

から見ると、一位に輝いたウランゴー・ビャンバツォグトさんは、漢字学習について自分なりの学習方法を発見し、それを紹介したものでしたが、スケッチブックを使って具体的に紹介しただけでなく、スピーチをする時の表情も大変豊かで、非漢字圏の学生にとって悩みの種である漢字学習がとても楽しいものに思える内容でした。また、二位の左雨さんは、四川大地震でボランティアをした体験から自分の将来を見つめ直したという内容でしたが、彼女自身の衝撃や感動、決意が聴いている人の胸にも響いて来るようで、とても堂々としたスピーチでした。そして、三位の羅凱奕さんは、留学生活や日本人の友達との日常的なやり取りの中で生じた摩擦や疑問、そこからの発見について楽しいエピソードを交えて紹介してくれましたが、彼女の気持ちの動きや柔軟に受け止める心の大切さが伝わってきました。

その他のスピーチも、留学を通して成長し母親との関係が変わったというもの、アルバイト先での人間関係を通した自分の成長、小学校での交流活動を通した自文化の再発見と自分の成長、毎日の自転車通学から見た日本での生活の様子など、どのスピーチも聴いている人が情景を生き生きと思い描くことができ、心を揺さぶられるようなスピーチばかりでした。

日々の学業の合間にスピーチの内容を一生懸命考え、発表の練習をした参加者の皆さんに敬意を表し、心から感謝したいと思います。

外国語でスピーチをすることは大変なことだと思いますが、自分の意見をまとめ、大勢の前で発表するというのは良い目標、良い経験になるはずです。次回のスピーチコンテストにも、さらに多くの留学生が参加して、審査員を大いに悩ませてほしいと思っています。

第 11 回　桜美林大学留学生日本語スピーチコンテスト　文集

2012 年 11 月 26 日発行

桜美林大学日本言語文化学院（留学生別科）
〒252-0206　神奈川県相模原市中央区淵野辺 4-16-1
TEL：042-704-7041　FAX：042-704-7033